

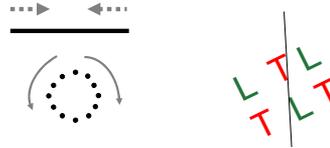
注意の不思議

～ 注意がある時、ない時～

“注意”してね！と言われてその意味がわからない人はいません。注意をある対象に向ければ邪魔物がたくさんある中からでもすぐに見つけることができます。逆に注意が向いていないと目には映っているはずなのに見逃してしまうこともあります。いったいこんなことを可能にしている**注意の仕組み**とはどんなものなのでしょう。

注意の不思議を体験してもらう**デモ**を用意しました。

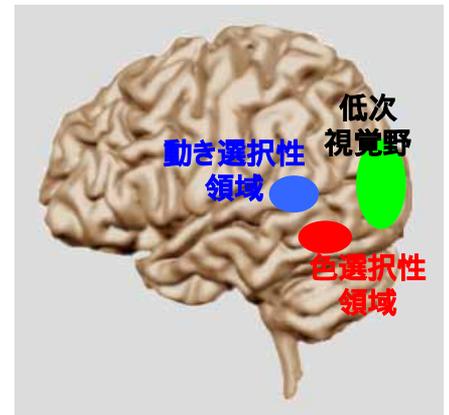
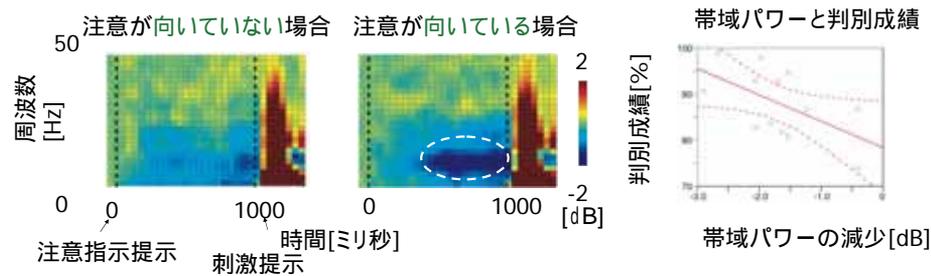
- 1: 直線を描こう: 右から左から？
- 2: どっちに回っているの？
- 3: 数えてみよう！



注意の仕組み

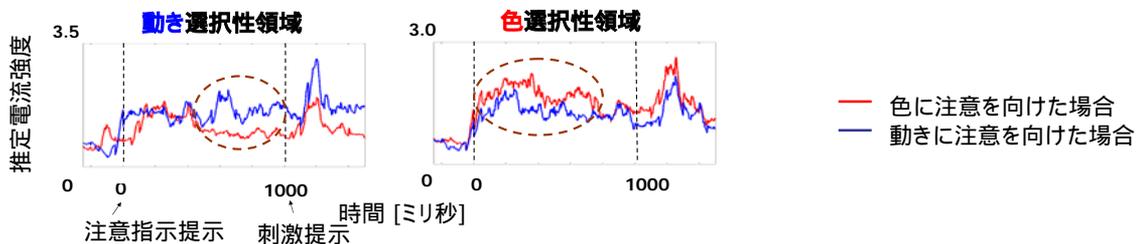
・空間への注意

空間のある場所に注意を移動させると、注意を向けていない場合に比べて、低次視覚皮質の対応した領域の帯域の活動が刺激提示の前から非同期的になることがわかりました。これはやがて提示される視覚刺激に対する準備活動だと考えられます。この準備活動が顕著な人ほど、次に提示される視覚刺激の判別成績がよいこともわかりました。



・特徴(色や動きなど)への注意

注意を色や動きなどの特徴に向けると、視覚皮質の色を処理する領域、動きを処理する領域が、それぞれ刺激が提示される前から活動することがわかりました。これもやがて提示される視覚刺激に対する準備活動だと考えられます。



人を助けるインターフェースへの応用を目指して

注意の仕組みがわかってくれば、脳活動から注意の方向や準備の状況を推定することが可能となってきます。我々は測定した脳活動から被験者が色と動きのどちらに向けているかを9割の確率で推定することに成功しています。このように注意メカニズムを解明することで、人それぞれのパフォーマンスを上げることを支援できるような、“**ちょうど良い時に、ちょうど良い所に**”必要な情報を提供できるインターフェースの構築を目指して研究を進めています。